

ベートーヴェンを楽聖たらしめた 最高傑作 **荘厳ミサ** 今夏上演



角田鋼亮(指揮) × 大阪新音フロイデ合唱団が挑む
大阪フィル

独唱：澤江衣里(ソプラノ) 八木寿子(メゾ・ソプラノ) 菅野敦(テノール) 三原剛(バリトン)

大阪新音の会員でつくる大阪新音フロイデ合唱団は7月27日、フェスティバルホールでベートーヴェンの「荘厳ミサ」を上演します。同作品はベートーヴェン(1770～1827)が晩年に作曲し、ベートーヴェン自ら「私の最高最大の傑作」と言っている大作です。

また、この曲は交響曲第9番と並行して書かれ、根底にある“思想”は同じ、編成も似ており、まさに「第九」と兄弟作品といえます。しかし演奏者にとっては「第九」を上回る難曲で、とくに合唱団には高度な技量が求められます。しかもラテン語の歌詞を延々とうたわなければなりません。もっとも、それを乗り越えるのが醍醐味と、合唱団員は意気込んでいます。

同合唱団は1962年の発足から来年で60年になりますが、「荘厳ミサ」に取り組むのはこんどが5度目。今回は本来、ベートーヴェン生誕250年と大阪新音創立70年記念として昨年夏に上演する計画でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため上演を断念。今年に延期したものです。

しかし、1年後れになっても「荘厳ミサ」上演の意義が薄れるものではありません。この曲をとおしてコロナ禍克服へ希望をつなぐとともに、たとえば、自然に対する人間の謙虚さを考える機会などにしていれば幸いです。

* 本番では歌詞の日本語訳を字幕投影する予定です。

21/ **7月27日(火) 19:00** フェスティバルホール

S 6200円
A 5200円
Box 7200円



大阪新音ニュース 特集号

発行：大阪新音 大阪市北区西天満 4-6-14 イーデザインビル 201 ☎ 06-6926-4888

(2021/04/01)

「荘厳ミサ」もまた、苦悩から生まれた祈りの曲

「荘厳ミサ」は1819年に着手し、足かけ5年間を費やして23年に完成しました(初演は24年)。この間、すでに始めていた交響曲第9番の作曲を中断して、あるいは合間をぬっての作業でした。

どうしてそこまで入れ込んだのかというと、ベートーヴェン(1770~1827)の大パトロンにして作曲の弟子だったルドルフ大公(1788~1831、神聖ローマ皇帝レオポルト2世の末子)が1819年、チェコのモラヴィア地方区の司教に任命されたので、そのお祝いにしようと考えたからでした。しかし、20年の就任式には間に合いませんでした。作曲中に構想がどんどん膨らんでいったためです。

大公に献呈する目的以上に、この曲への思い入れが募っていたからでしょう。実は「荘厳ミサ」の着想自体はかなり前からあったとも言われています。

ベートーヴェンは晩年にも絶望の時が――

ベートーヴェンは、「荘厳ミサ」に取りかかる前の7年間、どん底状態にありました。かつてベートーヴェンが、20代半ばで耳の異常を感じ始め、しだいに難聴となり、音楽家としての人生を絶望したことはよく知られています。このときは作曲家としての使命感を改めて自覚したことにより、危機を脱しました。1802年に記された『ハイリゲンシュタットの遺書』は遺書ではなく、再起の宣言でした。

以後は第3交響曲「英雄」(1803)、歌劇「フィデリオ」(1805)、ヴァイオリン協奏曲(1807)、第5交響曲

「運命」(1808) …など、怒濤の勢いで創作をしています。ところが1812年頃から再び大不振に陥ります。

理由としては、「不滅の恋人」(誰かは不明)との別離(1812)や、ナポレオン失脚後の政治の保守反動化で“自由”が失われたこと(1814~)、社会的混乱で後援者からの年金が得にくくなったこと、その時期ウィーンに“軽薄な音楽”がはびこったことなどが挙げられています。家族問題でも悩まされます。病魔にも襲われ死の恐怖にとらわれるなど、まさに精神的、身体的、経済的な打撃を受け続けます。

神に救いを求めたベートーヴェン

このときのベートーヴェンは“神にすがる”ことによって“復活”へのきっかけをつかんだようです。

ベートーヴェンはカトリックの家庭に育ちましたが、自身はさほど熱心な信者ではなかったようです。とくに当時の教会のあり方には批判的でした。しかし、精神のよりどころとして神をととても大切にしている、この停滞期にも図書館に通い、宗教曲を深く研究します。これがベートーヴェンを死の恐怖から救うとともに、創作意欲を再び燃え立たせたのです。

そして、ルドルフ大公への献呈を契機に作曲に励んだのが「荘厳ミサ」です。同じ時期の作品に「第九」、第30番以降のピアノ・ソナタ3曲などがありますが、それらはみな、ベートーヴェンがたどりついた精神的境地で結び付いているといえます。

手に持つのは「荘厳ミサ」の楽譜です ⇒

ベートーヴェンの肖像というと、右の画がよく知られています。ざんばら髪に鋭い眼差しのいかめしい表情、赤いスカーフが印象的です。

この画は1820年、肖像画家のヨーゼフ・カー・シュティラーがあるスポンサーから発注され描きました。もちろんベートーヴェンも了解していて、スケッチのため画家の所へ何回も通ったようです。

ところで、1820年といえば、まさに「荘厳ミサ」や「第九」の作曲の最中です。実際、左手に持っているのは「荘厳ミサ」の楽譜です(表紙に「ミサソレムニス」と書かれています)。右手のペンは推敲のためでしょうか。いずれにしても、創作力を取り戻したベートーヴェンの凜凜しい姿です。(原画は油彩、72×58.5cm、独 ベートーヴェン・ハウス蔵)



ミサ(曲)とは、そもそも ……

「荘厳ミサ」の“ミサ”は、キリスト教会で牧師や司祭を中心に会衆が神に祈りを捧げる「典礼」(和訳語)のことです。ただし、典礼はカトリックにおける儀式で、プロテスタント系の教会では「礼拝」(同)がこれに相当します。ミサの祈りは読唱と歌唱によって行われます。その、歌唱のための音楽が“ミサ曲”です。

キリスト教会では多くの祝祭日や儀式の日があり、そのたびにミサを執り行います。ミサはイエス・キリストと12人の弟子たちによる「最後の晩餐」に由来する、“死と感謝の祭儀式”で、とても重要な行事(宗教活動)です。そのため、式の進め方—祈りの読唱文言と歌唱詞、作法など—は厳格に定められています。この中にはパンとぶどう酒を受ける「聖体拝領」という儀式がありますが、これも「最後の晩餐」にもとづきます。

ミサにおいて神に捧げられる読唱文・歌唱詞(テキスト原典はラテン語)には、一年中変わらない「通常文」と、各祝祭日に使われる「固有文」とがあります。通常文は基本的に〈キリエ=あわれみの賛歌〉〈グロリア=栄光の賛歌〉〈クレド=信仰宣言〉〈サンクトゥス=感謝の賛歌〉〈アニュス・デイ=平和への賛歌〉の5編から成り、ミサの際は読唱と歌唱を交互に行います。ゆえにミサ曲は、メロディーは異なっても歌詞は同じです。

ミサ曲のメロディーは、古くはまちまちだったようですが、中世に「グレゴリオ聖歌」がまとめられると、以後はその旋律が一般的に使われました。しかし、15世紀のルネサンス時代、音楽の進化とともに、“祈りの音楽”にもいろいろな曲がつけられるようになります。つまり、ミサ曲は“実用性”とは別に、“音楽作品”としても創作されるようになります。近世以降は芸術性も追求され、鑑賞の対象にもなっています。

なお、信者らの死を悼むミサでは、特別に「死者のためのミサ曲」を奏でます。それがレクイエムです。

「荘厳ミサ」って、何が どう すばらしいの？

荘厳ミサと訳されている ミサ・ソレムニスとは「使徒書簡と福音書以外の部分がすべて歌われるミサ」という意味で、音楽的には「特別な機会のミサのための曲」なのだそうです。つまり、“交響曲”と同じ一般名称で、固有名詞ではありません。

ですから、荘厳ミサ(ミサ・ソレムニス)は、ベートーヴェンだけでなくモーツァルト(1756~1791)、ケルビーニ(1760~1842)、ブルックナー(1824~1896)らの、多くの作曲家が手がけています。それにもかかわらず、荘厳ミサ(ミサ・ソレムニス)といえは、今ではほとんどベートーヴェンの作品を指します。それほど「ベートーヴェンの荘厳ミサ」は素晴らしい、屈指の名曲なのです。

神聖な美しさが随所に

どのように素晴らしいのか—。それは、キリスト教の祈りの儀式(ミサ)にのっとった宗教曲ではあるけれど、宗教性を超えた内容をもっているからではないでしょうか。ベートーヴェンの、世の平和と人々の安らぎを願う気持ち、それを求める思想が、劇的盛り上げと、神聖ともいえるほどの美しい音楽で表

ベートーヴェンの「荘厳ミサ」自筆譜



現されています。

ミサ「通常文」にもとづく5楽章編成

ベートーヴェンの「荘厳ミサ」は、ミサの通常文に沿って5曲(楽章)で編成されています。内容を簡単に紹介しましょう。

【第1曲】 キリエ (あわれみの賛歌)

曲は3部に分かれています。冒頭すぐに重要なモチーフが出てきます。

標題は、「^{あわ}れみ豊かな(慈悲深い)神」を讃える歌という意です。哀れみを乞う歌ではありません。

【第2曲】 グロリア (栄光の賛歌)

4部構成。「天のいと高き所に神の栄光」という詞のとおり、生命力があふれています。一方で「世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ」と、人間の罪もさらけだしています。

【第3曲】 クレド（信仰宣言）

この作品（荘厳ミサ）の中心になる曲（楽章）です。これも4部に分かれています。

「全能の父である神を信じます。父のひとり子、わたしたちの主 イエス・キリストを信じます」との宣誓に続き、キリストの誕生～十字架にはりつけられ大いなる苦しみを受け葬られる～3日目によみがえり天に昇る…の、いわゆる受難と復活の生涯が、オーケストラと歌唱によって劇的に表現されます。

この曲（楽章）は、宗教音楽というより、“ベートーヴェンの音楽”そのものです。

【第4曲】 サンクトゥス（感謝の賛歌）

神への感謝の言葉を、ゆったりと静かに美しく歌います。また、途中で奏でられるヴァイオリンのソロがとても美しく、まさに神への感謝と祝福を表しているようです。全体として清澄な曲（楽章）です。

【第5曲】 アニュス・デイ（神の子羊、平和への賛歌）

ベートーヴェンが、とくに平和の願いを込めた曲（楽章）です。全体は3部構成。自筆譜のこの曲の第2部の余白部分に「内面と外面のこころのやすらぎへの願い」という書き込みがあることで有名です。

「われらに平和を与えたまえ」と歌われる中、これにかぶさるようにオーケストラの太鼓やラッパがにぎやかに奏されますが、これは戦争を暗示しているとか…。しかし、合唱と独唱はあくまでも「われらに平和を」を貫き、全曲を終えます。

何よりも 社会の平和と心の平安を願う

このように、ベートーヴェンの「荘厳ミサ」は、キリスト教の祈りの儀式音楽（ミサ曲）の形式の通りながらも、「内面と外面のこころのやすらぎ」、すなわち社会の平和と人々の心の平安こそ大切なことを強く訴えていると考えます。

この曲を聴いた作曲家のワーグナー（1813～83）が「真正なベートーヴェン的な精神をもつ、純粋な交響的作品」と評しているように（筆者は出典元を確認できていませんが…）、音楽的にも出色の“宗教曲”であることは間違いありません。

演奏に80分近くを要する大曲ですが、こうして作曲経緯やベートーヴェンの思いを探っていくと、より興味深く聴くことができるのではないのでしょうか。

（マ）



合唱団も必死で苦難を乗り越えようとしています

「荘厳ミサ」の合唱を担う大阪新音フロイデ合唱団は、新型コロナウイルス感染拡大のため一時休止していた練習を昨年9月に再開。小グループに分かれ、団員どうしの距離（ディスタンス）もとるなど、各種の感染防止対策を行いながら、毎週1回の練習（というよりも特訓）を続けています。その様子をネットで同時配信し、外出を控えている団員にもリアルタイムで状況を伝えています（3月まで実施）。同曲は、歌詞がラテン語だけに生半可には取り組めません。“仕上げ”に向け、4月から一段と気合いを入れます。（写真は大阪市内の会場で練習する合唱団）

年末は やっぱり 大阪新音フロイデ合唱団の「第九」です

指揮：角田鋼亮／管弦楽：京都市交響楽団／独唱：老田裕子・山田愛子・小餅谷哲男・三原剛

2021年12月14日（火）19:00 フェスティバルホール *入場券は7月発売予定